

臨床心理学と繋がったり重なったりしている「学」は実にたくさんありますが、今回はその一つである人類学の力を借りたいと思います。研究方法やアプローチには非常に近いものがあるのですが、これまで私たちの臨床心理学は、基本的に人類学を全く無視して来ました。その理由を考えるのはさておいて、人類学——文化人類学と言うべきでしょうが——この扉をまずは開けてみましょう。

現に生きている集団に参加しながら異邦人の視点を大切に文化人類学からの視点は、私たちに特別な力を与えてくれます。それは、専門家の常識を揺るがし、専門家依存体制には疑問符を投げかけ、専門家との付き合い方において、全く別の可能性を見せてくれると思います。

遙か以前から、人はいろいろな場面で、不安や恐怖に怯え、悲しみに打ちひしがれ、葛藤にさいなまれて来ました。屈辱や苦難はもちろん絶望も限りなく体験して来たでしょう。そうした時にどうしたか、何がなされて来たか？ 時代を超え、地域や社会を超えて、人間の長い歴史のなかで行われたであろうことを考えながら、現在「臨床心理（学）」と呼ばれていること、その営み（あるいはそんな言葉で括れないだろう「こころ」の動き）全体を見直してみたいと思います。

それには、言葉が生まれる前からのこと、あるいは言葉が誕生する前後のことも一緒に考えて見る必要があるかもしれません。それは現在の私たちには手が負えないことになるかもしれません。しかし、大切なことは、別の衣装を早く見つけることではありません。ずっとまどって肌になじんでしまっていることに対して、それは「脱ぐこともできる」という考えがもてるだけでも相当に意味のあることではないか、ということです。

更には、衣装というより、身に着けたものが張り付き、あるいは肌に浸み込んでいて、もはや脱げなくなってしまうことだってあります。過剰適応です。役割や言葉がその場にあまりにもピッタリしてしまって、なんの違和感もなくなる。その場にうまく包みこまれている多くの人には、それなりの穏和で平和な時と所を確実に与えてくれます。しかし、それは、背後に隠されている大変な犠牲がそれを可能にしているだけのことも多いのです。そして、私たちが棲む世の中は、外から見ると、実は????に満ち溢れています。

こうしたことに気づく、これだけでも大いに意義があると思っています。さらには、今回の大会で出会い、また体験することが、イベント（＝お祭り）だけに終わらないことを願っています。それらが 日常的なかで、別の視方や生き方を探り試すきっかけになるのであれば、これほど嬉しいことはありません。

脱ぐものが、（烏）帽子か鎧か、あるいはマスクか、はたまたパンツなのか分かりませんが、その時の身軽さと肌の新しい感覚や世界の鮮さを味わってみたいと思います。内なる世界と外の世界と、そしてその関係が、大きくあるいは微妙に動きます。それを「こころ」はどれほど、どのように、喜べるか、楽しめるか？ それが問題です。

今回のメインゲスト

東畑開人：心理臨床家で、心理的対人援助全体を人類学的観点からも見直し、臨床心理学を学ばんとする人達に、スキルだけではなく、その元まで探り考えるべきだと主張している。

松嶋 健：文化人類学、医療人類学が専門。精神病院をなくしたイタリアでのフィールドワークの成果は『プシコ ナウティカー イタリア精神医療の人類学』に結実している。近年は、「こころ」の問題を社会や自然のなかでどう捉えればよいのかについて研究している。